

英語自己学習プログラム開発研究

－自由が丘産能短期大学「基礎からの英会話」への取り組み－

Curriculum Design for English Self-learning Program

－An Approach to Designing “Basic English Conversation” at Jiyugaoka Sanno College－

池 田 るり子

Ruriko Ikeda

抄 録 本学において、英語再履修学生の増加により、特別指導の必要性が高まり、カリキュラム委員会での検討の結果、新規科目「基礎からの英会話」が追加された。英語の苦手な学生が存在する背景には、大学入学以前の教育現場における英語力低下が影響しており、対応策の必要性が課題となっている。実際の教育現場での現状を理解するため、特色GPの中で英語教育プログラムが採択された他大学、米国大学付属英語学校、大学入学前の英語教育現場からの情報収集を行った。「英語自己学習プログラム」の開発に向けて、コミュニケーション・アプローチによる教授法が効果的であり、他の科目で養われる能力（コミュニケーション力、プレゼンテーション力、ペアワーク力）との連携によるプログラム提案が必要となる。今後、高等教育機関である大学においては、制限された条件（授業時間数、クラスの規模など）の中で、効果的な英語教育のあり方、今後の方向性を整理することは重要である。

キーワード 自己学習プログラム コミュニカティブ・アプローチ 英語カルテ 国際交流
Self Development Programs, Communicative Approach, English Chart, International Communication

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1. 研究の背景と目的 | 5. 1 英語による英語での教育プログラム開発 |
| 2. 英語教育プログラムの現状と問題点 | 5. 2 国際交流プログラム |
| 2. 1 本学学生の英語力の問題点 | 5. 3 少人数制クラスおよび英語専用教室での運営 |
| 2. 2 大学入学前の英語力の問題点 | |
| 2. 3 日本人の英語力の問題点 | 6. 本学での今後の試み |
| 3. 英語教育の取り組みの現状 | 6. 1 テキスト |
| 3. 1 NHK 英語教育番組の取り組み | 6. 2 英語カルテ |
| 3. 2 他大学の新しい取り組み | 6. 3 新しい学び方の採用 |
| 4. 新しい英語教育メソッド | 6. 4 英語を英語で学ぶ取り組み |
| 4. 1 コミュニカティブ・アプローチによる最新学習方法 | 7. 考察 |
| 4. 2 メリス英語 | 7. 1 研究成果のまとめ |
| 4. 3 ピンズラーアメリカ英語 | 7. 2 今後の課題 |
| 5. 本学での英語教育への取り組みの変遷 | |

2010年1月18日 受理

1. 研究の背景と目的

本学において、卒業要件である英語科目の再履修学生の増加により、特別指導の必要性が高まり、本学カリキュラム委員会での検討の結果、新規科目「基礎からの英会話」が追加された。再履修者の特徴として、欠席、遅刻が多く、英語嫌いであり、英語授業に積極的に参加する意欲が見られない傾向がある。

英語の苦手な学生が存在する背景には、大学入学以前での教育現場での問題点もあり、本学のみならず、他大学においても英語力低下については、大きな課題となっている。特色ある大学教育支援プログラム（以下特色GPと表記）においても英語力向上のためのさまざまな試みが多く大学の行われている事実がある。

今後、高等教育機関である大学においても英語力に問題のある学生に対する新しい英語教育への取り組みや試みは大きな意味がある。本学においても、新規科目「基礎からの英会話」実施と多種多様な英語力の学生に応じた「英語自己学習プログラム」^(注1)の開発に向けて、どのようなプログラムが提案できるか現状を把握し、今後の方向性、あり方を整理する意義は大きい。

ここでは、実際の教育現場での現状を把握するため、特色GPの中で英語教育プログラムが採択された大学、英語教育プログラムに定評のある米国大学付属英語学校、大学入学前の英語教育の現場である中学・高校での取り組みや課題について情報収集を行う。

また、新しい英語教育メソッド、NHK英語プログラムを精査し、新しい英語プログラム開発（新規科目「基礎からの英会話」）に向けて、今後の本学における英語教育の方向

性、あり方、課題を明確にする。なお、以上の先行事例については、インタビュー、文献および資料解析等による調査を行う。

2. 英語教育プログラムの現状と問題点

2. 1 本学学生の英語力の問題点

本学において学生の英語に対する意識調査を記述式アンケートで行った。調査の対象者は、「基礎からの英語（1年生対象）」「基礎からの英会話（全学年対象、再学習プログラム）」「海外英語特講（全学年対象、カナダオカナガン大学海外研修プログラム）」「秘書と国際マナー（2年生対象）」の受講生100名を対象に「英語に関する自己評価」というタイトルで授業初回に実施した。

全体的な結果として、「英語は好きですか?」という質問に対して、半数以上の60%の学生が「英語が好きだ」と答えている。「英語を使う機会があるか」については、65%の学生が英語を話す機会を持たないと考えている。(表1)

次に「英語を学習する必要があるか」については、97%の学生が「必要だ」と感じている。また、「英語を学ぶにあたって、伸ばしたい能力は何か」という質問に対して、複数回答ではあるが、回答の多い順に並べると、「会話力」85%、「文法力」54%、「聞き取り力」54%、「単語力」50%、「読解力」30%という結果であった。(表2)

最後に「英語能力とは別に英語を伸ばすための必要な基本的能力」について、8つの項目を挙げ、英語学習に影響する能力について調べた。「得意」の回答の多い順に並べると、①「いろいろなものに興味を持てる」②「どちらかというとき明るい性格である」③「大き

表1 英語に関する自己評価アンケート集計結果 1 (本学)

対象クラス	アンケート内容		英語は		英語を使う機会が		学習の必要性	
			好き	嫌い	ある	ない	ある	ない
①基礎からの英語(1年生)			27	26	20	32	53	0
②基礎からの英会話 (再学習プログラム教科)			1	8	2	7	7	2
③海外英語特講 (カナダオカナガン大学海外研修プログラム)			7	2	4	5	9	0
④秘書と国際マナー (2年生秘書英語を含む)			25	4	9	20	28	1
総対象者(100名)合計			60	40	35	64	97	3

2008年8月～2009年1月実施

表2 英語に関する自己評価アンケート集計結果 2 (本学)

対象クラス	アンケート内容					英語を学ぶにあたって、伸ばしたい能力は何ですか？				
						文法力	単語力	会話力	聞き取り力	読解力
①基礎からの英語(1年生)						31	29	48	30	15
②基礎からの英会話 (再学習プログラム教科)						3	1	7	5	3
③海外英語特講 (カナダオカナガン大学海外研修プログラム)						3	3	7	7	4
④秘書と国際マナー (2年生秘書英語を含む)						17	17	23	12	8
総対象者(100名)合計						54	50	85	54	30
集計順位(多い順)						②	③	①	②	④

2008年8月～2009年1月実施

な声で話せる」④「誰とでもコミュニケーションが取れる」⑤「アイデアが流暢にどんどん出てくる」⑥「日本語でも短い文章でわかりやすく結論から話せる」⑦「過去のやり方にとらわれず、柔軟に問題解決できる」⑧

「自分にあった勉強方法を発見している」が挙げられる。(表3)

2. 2 大学入学前の英語力の問題点

千代田区内の私立女子中学校および高等学

表3 英語に関する自己評価アンケート集計結果 3 (本学)

アンケート内容		英語を伸ばす基本的な基本能力得意なものど苦手なものはどれですか。															
対象クラス		①誰とでも コミュニケーションが 取れる	②大きな 声で話せる	③日本語で も短い文章 でわかりやす く結論か ら話せる	④いろいろ なものに興 味を持てる	⑤過去のや り方にとら われず、柔 軟に問題解 決できる	⑥アイデア が流暢にと んどん出て くる	⑦自分にあ った勉強方 法を発見し ている	⑧どちらか というと明 る性格であ る								
		得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手						
①基礎からの英語(1年生)		21	32	18	17	36	42	11	42	18	35	19	34	34	19		
②基礎からの英会話 (再学習プログラム教科)		7	2	7	2	4	5	8	1	4	5	4	2	7	5	4	
③海外英語特講 (カナダオカナガン大学海外研修プログラム)		5	4	5	4	5	4	9	0	3	6	3	6	3	6	7	2
④秘書と国際マナー (2年生秘書英語を含む)		22	7	19	10	14	15	27	2	17	12	15	14	12	17	25	4
総対象者)合計		55	45	66	34	40	60	86	14	35	65	41	59	36	64	71	29
得意集計順位(多い順)		④	③	⑥	①		②	⑤	⑧	⑦		⑥	④	③	②	①	⑦
苦手集計順位(多い順)			⑤	⑥	③	⑧		④	⑦		①		⑤	④	③	②	⑦

2008年8月～2009年1月実施

表4 英語に関する自己評価アンケート集計結果 1 (入学前教育)

アンケート内容 対象クラス	英語は		英語を使う機会が		学習の必要性	
	好き	嫌い	ある	ない	ある	ない
①中学2年生	41	26	33	34	64	3
②高校1年生	20	16	20	16	35	1
総対象者(103名)合計	61	42	53	50	99	4

2008年8月～2009年3月実施

表5 英語に関する自己評価アンケート集計結果 2 (入学前教育)

アンケート内容 対象クラス	英語を学ぶにあたって、伸ばしたい能力は何ですか？ (※複数回答可)				
	文法力	単語力	会話力	聞き取り力	読解力
①中学2年生	28	40	46	27	32
②高校1年生	25	22	26	22	26
総対象者(103名)合計 *	53	62	72	49	58
集計順位(多い順)	④	②	①	⑤	③

2008年8月～2009年3月実施

校において学生の英語に対する意識調査を本学同様に、記述式アンケートで行った。調査の対象者は、「中学2年生対象」「高校1年生」の英語クラス受講生103名を対象に「英語に関する自己評価」というタイトルで後学期授業に実施した。

全体的な結果として、「英語は好きですか？」という質問に対して、半数以上の59%の学生が「英語が好きだ」と答えている。「英語を使う機会があるか」については、51%の学生が英語を話す機会を持たないと考えている。(表4)

次に「英語を学習する必要性があるか」に

ついては、96%の学生が「必要だ」と感じている。また、「英語を学ぶにあたって、伸ばしたい能力は何か」という質問に対して、複数回答ではあるが、回答の多い順に並べると、「会話力」69%、「単語力」60%、「読解力」56%、「文法力」51%、「聞き取り力」48%、という結果であった。(表5)

最後に「英語能力とは別に英語を伸ばすための必要な基本的能力」について、8つの項目を挙げ、英語学習に影響する能力について調べた。「得意」の回答の多い順に並べると、①「どちらかというと明るい性格である」②「いろいろなものに興味を持てる」③「大き

表 6 英語に関する自己評価アンケート集計結果 3 (入学前教育)

アンケート内容		英語を伸ばす基本的な基本能力得意なものど苦手なものはどれですか。															
		①誰でもコミュニケーションが取れる		②大きな声で話せる		③日本語でも短い文章でわかりやすく結論から話せる		④いろいろなものに興味を持てる		⑤過去のやり方にとらわれず、柔軟に問題解決できる		⑥アイデアが流暢にどんどん出てくる		⑦自分にあった勉強方法を発見している		⑧どちらかというと明るい性格である	
対象クラス		得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手
①中学2年生		29	38	39	28	18	49	47	20	19	48	18	49	36	31	57	10
②高校1年生		19	17	24	12	13	23	24	12	16	20	13	23	15	21	26	10
総対象者(103名)合計		48	55	63	40	31	72	71	32	35	68	31	72	51	52	83	20
得意集計順位(多い順)		⑤		③		⑦		②		⑥		⑦		④		①	
苦手集計順位(多い順)			③		⑤		①		⑥		②		①		④		

2008年8月～2009年3月実施

な声で話せる」④「自分にあった勉強方法を発見している」⑤「誰とでもコミュニケーションが取れる」⑥「過去のやり方にとらわれず、柔軟に問題解決できる。」⑦「アイデアが流暢にどんどん出てくる」,「日本語でも短い文章でわかりやすく結論から話せる」が挙げられる。(表6)

文部科学省(以下文科省と表記)による新学習指導要領の第4章外国語活動の表記については、第1項の「目的」において「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」とある。具体的な指導内容については、第2項の「内容」、第3項の「指導計画の作成と内容の取り扱い」において、詳細が記載されている。

この新学習指導要領の内容を取り入れるにあたって、中学校および高等学校で、直面している課題は以下の5つである。①英語授業時間数の35時間の増加に伴うカリキュラム編成上の時間確保。②「コミュニケーションの育成」のための授業の時間確保。③指導語数の300語増加に伴う授業方法の検討。④少人数クラス実施のための教員体制やカリキュラムの調整。⑤LL教室等の英語機器や施設活用とそれに伴う、新しい教授方法の研究。

また、小学校の英語教育導入初年度以降、運用については各小学校や都道府県教育委員会にゆだねられていたため、中学校および高等学校での英語教育運営については、中学進学後、英語能力の質的差があり、各現場での教員が苦勞している事実があった。その後、文部科学省が作成した「英語ノート」導入に

より、小学校の現場では、全国一定の教育水準を確保すべき動きに変わりつつある。

2. 3 日本人の英語力の問題点

アイビーリーグ(IVY League)大学^(注2)の1つであるコロンビア大学^(注3)の外国人向け大学付属英語教育機関(Columbia University, American Language Programs, 以下ALP^(注4)と表記)の初級クラス(Level 3~4 Class)を実際に担当されている教員へ、インタビューを実施した。インタビュー対象者は、コロンビア大学ALPで30年以上の教育活動を行い、現在、教員の指導教官で60歳の女性(以下G氏と表記)に依頼した。大学付属外国人向け英語教育機関(Columbia University, ALP)は、NHK教育テレビで放映されていた「テレビで留学！」の舞台となっている。

日本人の英語習得の傾向と問題点について意見を求めた。最近の傾向として、特に若い20歳代については、英語力について質的な変化が見られる。一般的に日本人は自分の意見を述べる習慣がなく、自己主張が下手で、英語を話す場面でもとても控えめ(Shy)だと思われていたが、最近の若い日本人学生と接していると、強くではないが、自己主張をする習慣を持っていると感じる。また、比較的反応があり、わからないときにわからないという表情をする学生が増えた。

また、間違ふことに恥ずかしいと感じ自分からなかなか発言しない日本人学生はまだ多いが、反応のある学生が増え、英語教員としての日本人学生とのコミュニケーションの取り方や接し方が変わってきたと感じている。

その反面、残念ではあるが、会話力に比べ、文法に対する理解が浅い傾向がある。意外な

フレーズを知っている割には、文法の理解が出来ていないことがある。80年代、90年代の日本人学生は、聴くこと話すことが苦手でも、文法の試験を実施すると高得点を取得するため、基礎英語力はあると判断されていた。

最近の学生は、聴くこと、話すことについては、上手になっているが、読むこと、書くことについては、レベルが下がっている。授業内で課題を完成することが出来ない傾向が強い。リスニングによる書き起こし (Dictation) ^(注5) については、意味がわからなくても、音として聞き取れる能力が高くなっている。耳が英語に慣れている傾向がある。この能力を生かし、全部を聞き取るのではなく、相手の意図を推測する力を養えば、日本人の「使える英語表現 (Useful Expression)」を伸ばせると考えている。

今後の日本人の英語力について意見を求めた。日本では、小学校での英語教育が義務教育化され、英語による英語教育がこれから一般的に進められると聴いている。今後、高いレベルでの英語能力が期待できる。国際化が進み、日本人が国際的な分野での論文や学会での発表などの活躍の場が増えると考えたと、大学、大学院での「英語を速く読む能力」、「文章を論理的に書く能力」を取り込んだ高度な英語教育が受けられる環境を検討すべきだと考えている。

3. 英語教育の取り組みの現状

3. 1 NHKの英語教育番組の取り組み

NHK教育テレビによる英語教育プログラムは、いつの時代においても大きな影響を与えてきた。インターネット社会といわれる現在でもやはり、NHKの英語番組は一般的に

利用されており、また、全国ネットでのマスメディアを通じて周知され、社会への影響はかなり大きい。ここでは、NHK教育テレビで2008年4月より放映されている英語教育番組を調べ、学生の立場に立って実際に視聴し、傾向を分析し、「今の時代のニーズに応えた英語教育とは何か」について追求できないかと考えた。

2008年4月において、NHK教育テレビで放映されている英語教育番組は、6種類あり、再放送を含めて週20本が放送されている。また、NHK教育ラジオの9種類の番組を含めると、他の外国語番組に比べ、英語教育番組の比率が高いことがわかる。

また、総合テレビにおいても、「リトル・チャロ」を含め、過去に教育テレビで放送した番組の再放送、子供向け英語番組「えいごリアン」、エンターテイメント要素の強い「英語でしゃべらナイト」などが放映されている。

NHK教育テレビで現在放映されている英語番組の傾向として以下の7つ①英語の基準レベルを義務教育 (中学) 終了程度の英語に置いていること。②ネイティブがよく使う「英語らしい言い回し」「使える日常会話表現」を多く取り上げていること。③映像 (Visual) と物語 (Story) を活用した、聞き取り (listening) 中心型になっていること。④番組ホームページでの復習プログラムと連動していること。⑤積み上げ式ではないいつからでも始められる1回完結型のプログラムになっていること。⑥放映時間が5分から20分という短時間集中型であること。⑦ニューヨークなどを舞台としたアメリカ英語が多いことが挙げられる。

表7 「リトル・チャロ」のテレビ・ラジオ・インターネットの三位一体学習システム

曜日 メディア	月	火	水	木	金	土	日
ラジオ(15分) 「チャロの英語実力講座」「英語は書いて覚える！」デジタルの時代でも、変わらぬ心理です。番組では覚えるべき表現がタスクの形で出題されます。	リトル・チャロ ラジオドラマ版 8～9分	コアコンテンツ「リトル・チャロ」を使い実践的なタスクで英語を学ぶ番組			リトル・チャロリスニング	ラジオ番組の 理解度チェックテスト	
テレビ(20分) チャロの物語をアニメ映像で感覚的に理解！英語のフレーズを頭で覚えずに、口、耳、カラダを使って覚える訓練をします。英語を学ぶ楽しさを伝えます。テキストも合わせてご利用ください。	リトル・チャロ カラダにしみこむ英会話	チャロのアニメがもっと見たい人は リトル・チャロ 5分アニメ 総合・教育での再放送でチェック					
	リトル・チャロ 5分アニメ						
ネット「チャロと English」 毎回の番組に対応した小問題にトライすることで、覚えた英語表現がより定着します。また、メンバー登録した方への特別サービス、掲載内の学習ページ「チャロと English」にてマイチャート、マイ単語帳を活用してください。日々の学習を楽しく、「やる気」の継続を応援いたします。	毎日のラジオ番組に対応したミニテスト 毎週のテレビ番組に対応したミニテスト					ラジオ番組の 理解度チェックテスト	

2008年度 NHK 語学番組「リトル・チャロ公式サイト」(<http://www.nhk.or.jp/charo/about/index.html>)より

その中で特に注目したいのは、アニメ「リトル・チャロ」という番組である。今までの英語教育番組と違うところは、まず、アニメーションを使った物語になっている点である。NHKのホームページに書き込まれている視聴者からの投稿を見ると、4月から番組スタートして以来、徐々に視聴者からの反響が増え、その物語に自然と入り込んで行く傾向がみられた。また、この番組の教育的な特徴は、さまざまなメディア（テレビ・ラジオ・ネット）と連携し、クロスメディアで、総合的に英語が身につくように構成されている点である。物語性の強い、英語教育においては過去になかった新しい試みである。（表7）

3. 2 他大学の新しい取り組み

他大学の英語教育に関してのさまざまな試みが行われているのは事実である。各大学のホームページを見ると、「特色ある大学教育支援プログラム（以下特色GPと表記）」における英語教育への取り組みが目立っていた。インターネットで特色GPの中で英語教育に関する検索を行ったところ、採択された大学26校の検索結果があった。特色GPへの採択を受けた大学の傾向として、英語教育または言語学を専門とする大学、国際教育および国際関係に関わる大学、留学生を比較的多く受け入れている国際交流の活発な大学、海外プログラム（海外研修、長期留学プログラム、

海外インターンシップ)に取り組んでいる大学、工学系の英語教育言語システムの開発などに取り組んでいる大学など英語に重点を置く大学が多かった。

その取り組みの中でも、本学として参考になる特色GPはないかと内容を詳しく調べてみると、一般教養としての英語教育でさまざまな取り組みが見られた。たとえば、英語サロン(特定の教室に英語を母国語とする教員が常駐し、学生が自由に会話を楽しむ場所)の実施、留学生との交流会(文化、行事、語学相互学習など)、スピーチコンテスト、集中国内英語合宿などが挙げられる。本学ですでに過去において実施していた内容もあったことがわかった。

特色GPに英語教育で採択された大学と本学を比べると英語教育を通しての学習目的や根ざすゴールおよび方向性について質的な違いがあり、また、英語教育に関する授業時間数も多く、クラス規模も8名~15名以下の少人数制を取り込んでいる大学がほとんどであり、本学で参考にするには条件に合わない内容が多かった。

4. 新しい英語教育メソッド

4. 1 コミュニカティブ・アプローチによる最新学習方法

NHKラジオ英語講師として活躍された東後勝明氏は、日本人が英語を使えるようにならないのは、どこかに決定的な要因が潜んでいるに違いないと確信し、これまでの文法、文型中心の勉強に限界があり、フレーズを覚え、練習をし、それから使うようになるという勉強の順序では「使える」ところには到達しない、ことばを知っていることとコミュニ

ケーションとして「使える」こととは別の問題であると考え、1998年に日本の英語教育の「最後の教授理論」として「コミュニケーション・アプローチによる最新学習法」を日本に紹介した。

「コミュニケーションアプローチによる最新の教授法」は、以下の3つの原則に基づく。
①コミュニケーションのためのツールとしての自然な英語だけを覚える。
②全部を聞き取る力より、ことばの意味を超えて相手の意図を推測する力を養う。
③「覚える」より、楽しく「使う」を優先する。(映画や語学番組を通して楽しく英語に触れること)。東後氏によれば、この3つの原則を守れば、「使える」英語に到達するとしている。

本学では、過去にこの学習法を導入し、長期留学プログラムのための事前教育「コミュニケーション」の教材の開発および教員の育成、英語授業の実施を行い、成果を挙げていた時期があった。

4. 2 メリス英語

メリス英語とは、「英語で考える力」に焦点をあてた、「英語の思考回路」をつくるためのトレーニングプログラムである。英語で問われるクイズに答えるだけだが、毎日15分、1レッスン40問。全コース終了までに64レッスン合計2560問を学ぶことになる。

出題される内容は、いたって常識的な問題で、例えば、Parents are a mother and who else? (両親のうちお母さん以外は誰?), You can smell things because you have WHAT in the center of your face. (匂いを感じる場所で顔の真ん中にあるのは何。)など、問題も英語も比較的簡単な言い回しなので、まっ

たく聞き取れないということは考えづらい。問題の分野は、スポーツから映画、歴史、文学、地理、経済、音楽などバラエティ豊富なジャンルからの出題なので、飽きることなく続けられる傾向があった。学習期間は2ヶ月で、CD16枚と問題文と回答4冊の教材を目の前にすると過大な学習量と思われるが、続けているうちに、気がつくと修了できていたというシステムである。(ユーキャン通信教育講座教材参照)

4. 3 ピンズラーアメリカ英語

ピンズラーアメリカ英語は、「ポール・ピンズラー」^(注6)という人の名前から由来している。ピンズラー博士は音声学、統計学、コンピュータ科学、心理学など幅広い研究に取り組み、画期的な語学教育プログラム「ピンズラーメソッド」を開発した。英語のレベルに応じて5つのコースが用意され、1日30分での聞き取りながら、音声ガイドの指示に沿って、メリス英語同様に単語・文法の丸暗記ではなく、毎日聞いて、真似をすることによって、英語を話す能力が上達し、英語で聴いて、英語で考え、英語で答える「英会話の思考回路」が出来ていくメソッドである。1日30分、CD16枚、学習期間3ヶ月程度になっている。

メリス英語と違う大きな特徴は、音声学を意識し、原則テキストを使わないで、音にのみ集中しなければならない。基本的に会話状況を説明し、視聴者の想像力を駆り立てた後、英会話文が聞こえてくる。例えば、「今、あなたの横に上品なご婦人が座っています。道を聞きたいので、声を掛けます。」このような場合は「Excuse me?」と声を掛けてみ

ましょう。このように1回目は状況を考えさせ、回答にあわせて聞こえた英語を真似して発音させる。2回目は、同じフレーズを繰り返すのではなく、1つの会話文を細かに分け、後ろから1つ1つの単語や意味の固まりを発音させる。例えば、「声を掛けるフレーズ、Excuse me?」について、細かく分けて発音してみましょう。では後ろから発音します。Me? Excuse? Excuse me?」3回目は、トータルの発音を再度、数回発音させます。例えば、「それではトータルで発音してみましょう。Excuse me? Excuse me? Excuse me? 発音できましたか。」4回目は、その後、確認のために今学んだフレーズについて質問され、それに英語で答える。例えば、「では、今あなたの横に座っているご夫人に声を掛けてみましょう。英語でなんと言いますか?」4回目の質問については、自然に「Excuse me?」と答えられるようになるプログラム学習である。(ユーキャン通信教育講座教材参照)

5. 本学での英語教育への取り組みの変遷

5. 1 英語による英語での教育プログラム開発

1990年代には、ECCやベルリッツなどの英語学校で、コミュニケーション・アプローチによる最新学習法を取り入れていた。本学でも1990年代には、企業向け海外研修プログラム等を実施していた国際部と短大長期留学プログラムを実施していた通信教育部特設課程との協働開発で、その手法と英語を英語で教える新しい科目「コミュニケーション」のテキスト、教授法と教育プログラムの開発をし、特設課程の留学事前教育プログラムとして実

施した。(特設課程と国際部との協働開発)

教育プログラム開発については、特設課程英語教員(ネイティブと日本人)、国際部職員およびサジェストペディア語学研究所研究員^(注7)との定期的な研究会での検討を重ね、完成したテキストを使い、授業実施に向けての教育実習(研修)を行い、日本語をいっさい使わない英語による英語授業の実施に至った。

5. 2 国際交流プログラム

1990年代に特設課程で2年間の短大のカリキュラムの中に長期留学プログラム(10, 8, 5, 3, 1ヶ月)を導入していた。現在では長期留学を実施している大学は多いが、当時は、15名程度の小グループで、しかもビジネス、秘書、ホテルなどの専門科目を留学先で勉強する約1年間の長期留学プログラムは本学しかなかった。また、海外インターンシップを取り入れた最初の留学プログラムでもあった。

また、学内での外国人との交流も盛んに行われ、当時大学入学前の留学生を受け入れる日本語別科というコースがあり、留学生のケアをする海外交流センター主催の留学生との交流会(ランチの交換会など)、ネイティブティーチャーによる授業時間外の会話サロン、国際部主催のニューヨーク大学(New York University, 以下 NYUと表示)と本学との合同授業、学内英語スピーチコンテスト(年1回)、ネイティブティーチャーと日本人教員とのペアティーチングなど、特色GPに載っているような試みは、1990年代には時代のさきがけとしてすでに実施していた。

5. 3 少人数制クラスおよび英語専用教室での運営

英語クラスの人数については、特色GPでも挙げられる15名以下の少人数制は特設課程でも運営していた。クラス数が多くなることに比例して英語教員数が増えることになり、同様に教室数の確保が必要になる。本学では、その当時、日本語禁止の英語授業専用教室(8号館)があり、語学専用の固定教室のため、壁に世界地図や海外のポスターが貼られ、語学専用の机付椅子を配置し、英語教室の雰囲気作りを施していた。

6. 新規科目「基礎からの英会話」での試み

6. 1 テキスト

新規科目導入年度にあたり、テキストに関して、学生へのヒヤリングを行った。学生からの要望として、「卒業後も使えるもの」、「比較的安いもの」、「持ち歩きに便利な小さめのサイズ」、「絵の多いカラフルなもの」、「辞書が必要ないもの」などが挙げられた。そこで、学生の要望を鑑みて、海外旅行者から人気のある「指さし会話帳シリーズ」の「21 JAPAN」(情報センター出版局)を使用することにした。それに加え、文法等をカバーするため、サブプリントを活用する。

6. 2 英語カルテ

自主的に英語能力について各自が個人記録を残す習慣をつけることで、英語に意識の向上を図るため、「英語カルテ」を作成。学期内で2回ほど自己評価、コメントを記入させ、教員からのコメント等のフィードバックを行う。カルテの内容は、英語での声だしを目的

として「早口ことば」,「文法(時制と5W1H疑問文)」,「語彙(身近な名詞,動詞,形容詞)をテストし,記録するようにする。

6. 3 新しい学び方の採用

新しい学び方で学ぶことは,学生にとって,導入から慣れるまでの猶予期間が必要である。コミュニケーション・アプローチによる学習法が有効だとしても既存の方法(中学,高校での学び方)と交互に取り入れながら,徐々に新しい学び方に移行していく必要がある。

英語の苦手な学生への「スピーチコンテスト」の導入については,時間をかけて,丁寧に指導する必要がある。

また,再履修学生の傾向として,受講姿勢に対する指導も不可欠であり,欠席,遅刻,課題を忘れた場合,そのままにせず,必ず簡単な毎回同じレベル内容の課題(イエローシート)を渡す。

6. 4 英語を英語で学ぶ取り組み

英会話学校などで行われている「英語を英語で教える」指導方法だが,学生も日本人教員との英語での会話には違和感はある。教員も同様,1分前まで日本語の環境から教室に入って,英語モードへの切り替えは,どんなに英語力があっても,難しい。学生の英語力や性格をよく把握した上で,英語のみでの対応の頻度を検討する必要がある。例えば,10分だけ英語以外使用禁止時間の設定,英語による質問タイムなど,英語で話す不便さを楽しむ時間を導入することである。

7. 考察

7. 1 研究成果のまとめ

本学の学生へのアンケートの結果において,英語のレベル,頻度については今回の調査では不明だが,意識として「英語を使う」機会があったと感じている限りは,英語を話そうとする意識を持っている学生が35%存在するということが明確になった。

伸ばしたい能力については,学生が英語の何について興味があるかがわかった。本学の学生も「会話力」を伸ばしたいと思う平均的な考えを持っていることがわかった。「文法力」について54%の学生が伸ばしたい能力として回答していた。この結果から,実は,文法の必要性も感じているということがわかった。「私と英語」についての自由記述の部分で多かった「文法ではなく,英会話を勉強したい」という要望と矛盾している。これは,学生が,英語についての文法など基本的な部分の必要性を感じながら,英語を学ぶ楽しさや面白さと一致していないと感じていることになる。

また,英語を学ぶ基本的な能力についての①～④までの結果(表6)から,本学の学生は86%の学生がいろいろなものに興味を持ち,71%の学生が明るい外交的な性格で,66%の学生が大きな声で発言でき,55%の学生が誰とでもコミュニケーションが取れると考えられる。つまり,学生の意識として,英語を伸ばすための必要な基本能力と英語以外の本学でコアになる授業において習得できる能力と一致している。

⑤以下の項目については,過去のやり方にとらわれている学生が65%,自分にあった勉強方法を持っていない学生が64%で,新しい

スタイルの英語教育プログラムの導入については、若干学生自身戸惑う部分もあるが、逆に自分にあった勉強方法を見つけれれば、素直に受け止め、学ぶ力があると期待したい。

クラスごとの傾向については、大きな差異はないが、新規科目「基礎からの英会話」においては9名中8名の学生が「英語が嫌い」であり、その反面、英語が「必要だ」と考える学生は7名おり、英語は嫌いだ、必要と考えている学生が多いことがわかった。まず、苦手意識をなくし、英語を好きにさせることから始めることが必要である。

英語教育に関する文科省からの新学習指導要領について千代田区の高校の教員との交流を通して、入学前の学生の英語教育の現状が理解できた。中学校、高校での必要な英語力は、以下の4つ①言語だけでなく、文化交流等を含めた体験的な英語によるコミュニケーション力を育むこと。②ネイティブスピーカーおよび英語の堪能な地域の人々の指導体制の充実化をはかること（英語を英語で学べる環境づくり）。③感覚的な英語理解力を養うために音声や画像（CDやDVD）などの視聴覚教材の積極的な活用をすること。④他教科（国語、音楽、美術など）で学んだことを活用できる工夫を取り入れることである。

中学生の傾向と問題点については、小学校での英語導入時は、まだ、統一された教授方法ではなく、各学校にゆだねられていたため、中学入学後の英語力の差がはっきりと見られた。英語力の差とは、会話を中心に学んだ学生は、英会話でのコミュニケーションを楽しむ傾向があり、机に向かって、読み、書きが苦手な傾向が強い。アルファベット等の文字

を書くことや単語を読むことを中心に学んだ学生は、英会話が苦手、電子辞書に頼る傾向が強い。質的な英語力の違いがあるので、クラスで全部を取りまとめていくのが難しい状況だった。現在の小学校英語教育は、文科省のサイトから確保できる「英語ノート」を使うことで、全国一定の教育水準が浸透してきた。これによって、小学校から中学校への継続に留意した指導計画が作りやすくなった。

今後は、小学校から高校までの一貫教育が確立すれば、大学生の英語力もある程度伸びていくと期待している。

メリス英語、ピンズラーアメリカ英語、NHKの英語講座等、新しい英語学習法を学習体験することにより、これからの授業プログラムへの気づきとなった。例えば、メリス英語、ピンズラーアメリカ英語を実際受講してみて、今の学生が苦手な復習や丸暗記の必要なく、勉強という感覚よりも音楽を聴くような感覚で学べた。ただし、英語上達の鍵となる「英語の瞬発力」が自然に身につくという点では効果的だが、本学のようなグループワークやペアワークを中心とした英語授業で取り込むには、やや単純作業であり、費やせる時間数からも、個人作業になるので難しいと思われる。メリス英語、ピンズラーアメリカ英語共に「新しい学習方法」として紹介するための体験的な取り組みは出来るかもしれない。

NHK英語講座については、東後氏の「コミュニケーション・アプローチによる最新学習法」の3つの原則に沿った内容であり、現代に受け入れられている最新の英語教育の傾向と考えると、本学の授業に導入できる可能性

は大きい。

7. 2 今後の課題

英語教育を他の科目と独立させるのではなく、本学の英語教育に生かせる英語以外の他科目で修得できる基本能力（ペアによる協働、グループワーク力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、考えを深める力）を新規科目「基礎からの英会話」へ連動できるよう検討すべきである。英語がコミュニケーションとしてのツールと考えると、これらは、英語に必要な能力でもあり、本学入学後に身につく能力でもある。今後は、プレゼンテーションの授業で行うスピーチ内容と連動したテーマでの英語によるスピーチコンテスト、楽しい英語としての英語ゲーム、インターネット、PCソフトの活用、ロールプレイ等のペアワーク、いろいろな人と話せるコミュニケーションの場としてのグループワーク等の導入を検討する必要がある。また、クラス環境と学習時間の問題については、本学の現状を鑑みて週1回の授業と通常の教室を使って出来る範囲内での英語クラスの雰囲気作りやプログラム作りを検討すべきである。

新規科目「基礎からの英会話」への今後の試みとしての検討課題は以下の5つである。

① テキストの選定（卒業後も使えるもの、比較的安いもの、持ち歩きに便利な小さなサイズ）②英語カルテの実施（自主的な英語能力の個人記録の習慣づけと英語の意識向上、学生能力に応じたアドバイス）③新しい学び方の採用（学生の導入から慣れるまでの猶予期間を加味した採用）④欠席、遅刻、課題を忘れた場合への対応（正しいクラスルール、マナーの啓蒙、簡単な内容の課題（イエ

ローシート）を課すこと）⑤英語を英語で教える教授法の実施（学生の英語力や性格を把握した上で、英語オンリーでの対応の頻度を検討すること）。

教室の現場で感じることは、英語力の問題点が質的に変わってきたことである。入学してきた学生の英語力の問題点は、大きく3つに分けると、①会話能力が高いが、長文読解やライティングの苦手な学生（コミュニケーション型）②文法能力、長文読解力が高いが、聞き取りや英語を声に出すこと（会話）が苦手な学生（文法読解型）③根本的に英語が苦手嫌いになってしまった学生（放棄型）が挙げられる。実際の本学の現場では、教室全体の様子として、①の学生は、比較的教員の顔を見て会話をし、②の学生は電子辞書やテキストに視線を置きながら会話をする。③の学生は、指示されない限り、目を合わせない傾向が強い。単純に文法等の基礎学力を底上げすることではなく、それぞれの学生の英語に対する能力を把握し、進めていくことが、今後の課題となる。

今後は、本学の学生の英語に対する意識調査・分析を継続し、今後も学生の傾向を鑑み、新規科目「基礎からの英会話」を運営しながら、授業開発の基盤を作るように努力して行く。

今回、研究助成金により個人研究活動をすすめることができた。今後も新しい英語教育プログラム開発のために調査および研究を続けていきたい。

参考文献

- 1) Brenda Wegmann and Miki Prijic Knezevic, "Interactions I, II", "Mosaic I,

- II” McGraw-Hill Publishing Company 2002
- 2) Betty Schramper Azar, “Understanding & Using English Grammar”, Prentice-hall, Inc., 1999
- 3) Gail Fingado & Mary Reinbold Jerome (ALP, Columbia University), “English Alive”, Little, Brown and Company, 1982
- 4) 日本放送協会・日本放送出版協会編集, リトル・チャロ 体にしみこむ英会話, チャロの英語実力講座, 日本放送出版協会, 2009
- 5) 東後勝昭, 英会話 最後の挑戦 コミュニカティブ・アプローチによる最新学習法, 講談社, 1989
- 6) 松本 亨, 書く英語 実用編, 基礎編英友社, 2008
- 7) ハ・ヒョンジュ (河 賢珠), 小学生のための英文法365日, 英単語365日, 英会話365日すばる舎, 2006
- 8) ふかぎふ, リトル・チャロ, NHK出版, 2008
- 9) 安田正&ジャック・ニクリン, 英語のプレゼンテーション技術 (English Presentation Techniques), The Japan Times, 1993
- 10) 高田 誠, 成功へのみちしるべ 英語の学び方, 旺文社, 1993
- 11) Columbia University American Language Programs Bulletin2008 - 2009

WEB参考資料

- 1) 文部科学省 国際教育, 小学校外国語活動, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/jouhou/tokubetsu.htm, 2009/3/30
- 2) 文部科学省 中央教育審議会 初号中等

教育分科会 教育課程部会議事録 (第39回 英語教育に関する審議答申),

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/004/, 2009/3/30

- 3) 文部科学省学習指導要領等改善について, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm, 2009/3/30

- 4) Columbia University American Language Programs, <http://www.columbia.edu/alp>, 2009/3/30

- 5) NHK外国語講座 チャロ・オンライン, <http://www.nhk.or.jp/charo/>, 2009/3/30

- 6) 文部科学省, 特色ある大学教育支援プログラム, http://www.mext.go.jp/a_menu/houdou/ 2009/3/30

- 7) ユーキャン通信教育講座, http://www.u-can.or.jp/course/data/in_html, 2009/3/30

- 8) メリス英語, <http://home.catv.or.jp/pp/no-tear/meris.html>, 2009/3/30

- 9) ピンズラーアメリカ英語, <http://www.serendipper.net/>, 2009/3/30

脚注

注1) 「自己学習プログラム」の「自己学習」とは, 「自主的に出席しようと思わせる」, 「自主的な学習意欲を持たせる」という意味。

注2) IVY League Universitiesはアメリカ北東部にある私立大学8校の総称。いずれも長い歴史と伝統, 大学の名門という誇りを持つ大学。8校の大学と創立年は以下のとおり。

- ①Brown University (1764),
- ②Columbia University (1754),
- ③Cornell University (1865),
- ④Dartmouth University (1769),
- ⑤Harvard University (1636),
- ⑥Princeton University (1746),
- ⑦University of Pennsylvania (1740),
- ⑧Yale University (1701)

注3) Columbia Universityは18校からなる総称。①大学4校：Undergraduate Studies (Columbia College, Barnard for women's College, The School of Engineering and Applied Science, The General Studies), ②大学院14校：Graduate School (Manhattan Campus：The School of Architecture, Planning and Preservation, Graduate School of Arts and Sciences, School of Law, Graduate School of Business, School of international and Public Affairs, Graduate School of Journalism, School of the Arts, School of Library Service, Teachers College, School of Social Work, The Columbia Presbyterian Medical Center：Thee University's Division of Health Sciences includes The college of physicians and Surgeons, The School of Dental and Oral Surgery, the School of Nursing, the School of Public Health)

注4) Columbia University, American Language Program の総称。外国人を対象とした大学付属英語教育機関。大学独自のテストにより、クラス分けを行い、レベル3～8までの受講生の目的に応じて、高度な英語教育を提供している。レベル8クラスはTOEFL600点程度。

注5) CDなど音響機器を使い、物語などの英語を何度も聞きながら、すべてを英語で書き出す勉強方法。

注6) ポール・ピンズラー博士－コロンビア大学フランス語研究で修士号、博士号を取得。1957年カリフォルニア大学ロサンゼルス校フランス語学科に言語研究所を創立。1961年～70年オハイオ州立大学言語学研究所長。過去に本学の留学先であったオハイオ州立大学において、この学習法を受講させていた。

注7) 独自の新しい英語教育に関する学習教授法 (Suggestopedia) の研究開発を行い、情報提供、教員養成のための研修プログラムなどの普及活動を行っている非営利団体。1990年代、本学が日本での活動をサポートしており、自由が丘キャンパス内に研究所を開設していた。現在は、独立し、日本サジェストベディア学会として国内での活動を続けている。